放眼日中

北京の公共交通機関

1年ぶりに北京を訪問した。今回は時間に余裕があったので、バスと地下鉄で移動した。北京で最初の地下鉄は何と文化大革命中にできた、と聞けば知らない人は驚くかもしれない。現在の地下鉄2号線は二環路を周回するが、それは旧ソ連との決戦に備えた防空壕であったとの話もあるから面白い。

その地下鉄、歴史は古いものの、その後2008年の夏季五輪開催前まではほとんど発展がなかった。しかし、最近では新線の建設が進んでいる。この地下鉄の特徴は何といっても料金が安いことである。どこまで乗っても僅か2元（約25円）だ。もちろん、北京市内の交通渋滞を緩和する市政府の苦肉の策だが、最近の物価上昇局面でどこまでこの値段を維持できるのだろうか。

しかし、広大な北京のこと、交通の主力は依然としてバスである。以前、当地に駐在している間は乗ることのなかった北京のバス、最初は路線が全く分からず難儀したが、慣れてしまえばこれほど快適な乗り物はないと思う。季節が良かったせいもあるが、風景も見られて、地下鉄より便利である。そして何より「一卡通」という日本のSuica（スイカ）のようなカードを使えば、驚くなかれ、料金は0・4元（約5円）で済むのである。世界の主要都市で、ここまで公共交通機関の料金が安い都市は他にあるのだろうか。

ただ、バスの難点はその運転が荒いこと。東京のバスは非常に丁寧な運転で、お年寄りが乗ると座るまで発進しないが、ここ北京ではお年寄りでもお構いなく、交通事情で急発進する。よくこれで転倒事故などがないものだと思うのだが、見ているとお年寄りも子どもの頃からバスに慣れており、しっかりと足を踏ん張り、倒れることはない。日本とは逆で、小さな子どもが乗って来ると、お年寄りが席を譲っている姿が今の中国を象徴しているのかもしれない。最近の子どもは見るからにひ弱で、いかにも事故に遭いそうだ。

もう一つ気になるのが、車掌さんだ。料金の支払い、アナウンスの自動化が進む中、彼女らの役割が終わりつつあり、一見無駄なように見える。だが、カードを持っていない地方から来た乗客に切符（1元）を売り、混雑時に乗客をてきぱきと出口へ振り分け、お年寄りに席を譲るよう若者に呼び掛ける。また、北京のバスの特徴である2両連結車両でありがちな不正乗車の防止にも目を光らせる。

ある日の車掌さんは40代の女性、実に朗らかで皆に話しかけ、よく笑う。釣られて席の近いお年寄り同士に会話が生まれ、車内は昔の北京の胡同を彷彿とさせるにわか小劇場と化した。今や街中では見ることが少なくなった濃密な空間が出現し、懐かしい時間が流れた。物価高騰が著しい北京で外国人として、格安の娯楽を楽しんだ。

地下鉄の建設で感じるのは、古き良き街並みが破壊されていくことだ。それと、周辺の地価が急上昇して、昔から住む住民の生活の場がなくなっていくこと。さらには、地下鉄の発達により住民が郊外に移住し、いずれはバス路線がなくなっていくことである。それが都市化の必然ではあろうが、バスの車内で楽しそうにおしゃべりしているお年寄りたちを見ていると、何となくやるせない気持ちになる。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。